
未完作品（放置していた過去の産物）

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未完作品（放置していた過去の産物）

【Nコード】

N2384W

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

この作品は、今までに書いた作品の中で、削除していなかった途中で挫折・放置した未完の作品です。

書きはじめは、結末や話の流れが見えていた筈なのに、時間の経過と共に薄れていき、書けなくなつて放置していました。

そのまま置いておくのも可哀想なので、私以外の方の目に届く所に置いていきます。

続きを書く予定はありませんが、もしかしたら書くかもしれません。
連載形式で、少しずつアップしますが、初めにも言った通り、全て
未完で終わっています。

完成図（購入）（前書き）

やる気は十分だったのですが……。

完成図（購入）

パッケージの可愛い仔犬の写真に騙されて、そのジグソーパズルを買ってしまった。

出来上がったら、額に入れて飾ろうとサイズに合わせた額縁まで購入して。

でも、家に帰って気が付いた。 100000ピースって何？

その日は、特に何を買おうという訳ではなかった。暇潰しがてら、近所のショッピングモールに出掛けたんだ。

入口を入って、ただウィンドウショッピングを楽しむつもりだった。服を見て。鞆を見て。テレビを見て。家具を見て。こんな服を着て、何処に出掛けようか……とか妄想してみたり。こんな服には、どんな鞆が似合うかと想像してみたり。家の家具に不満があった訳じゃないけど、もし結婚したらどんな風にどんな家具を並べようかと考えてみたりして、ショッピングモールの中をうろろろしていた。ペットショップで犬や猫を見た後、隣にあった玩具売場を見て回った。そう、あの時、あそこに行かなければ良かったんだ。

玩具売場の中で幼児用の知育玩具や、次世代ゲームマシンなんかを、別に買うわけでもなく吟味しながら、玩具コーナーをゆっくり回る。

もうすぐ、レジで出口って所まで来て、ふと目をやると可愛らしい仔犬が七匹寄り添って並んでいる写真が飛び込んできた。気になつて近くに寄ると、ジグソーパズルだった。

先程ペットショップで犬を見たせいだろうか、無性にその仔犬の写真が欲しくなって、気が付くとそのジグソーパズルを買っていた。しかも額付きで。そしてそのままウキウキして家へ帰ったんだ。

「何これ？ 100000……ピース？」

家に到着して、取り出したパズルを見て衝動買いの恐ろしさを痛感した。

というよりか、100000ピースというのは初見だった。

『こんな物……存在するの？』

現実を疑いたいところだったが、現に目の前に存在するそのものが、非現実的でない事を説明している。

【パズル自体の大きさが、極端に大きくならないように、このパズルは世界最小の大きさと作られています】

そう書かれたパズルのパッケージを開けると、更に僕は目を疑った。

『な……んだ……これ？こんなに小さい……の？』

普段目にする1000ピースのパズルの大きさとは、比較にならない程小さかった。しかも、1000ピースのパズルが、 25×40 だとすると、10000ピースのパズルは、 250×400 という事になる。しかも、その額の大きさが、1000ピース用だったんだ。

『ピースの大きさが10分の1……。こんな小さいパズル……。できるのか……。？』

ある種、絶望にも近い感情が頭を過ぎり、僕はそのまま購入したばかりのそのジグソーパズルを眺めたまま、どうする事も出来ずにただ眺め続けていた。

完成図2（枠組み）

『さてと、どこから取り掛かるのか……』

結局、昨日は【やる気】も失せて部屋の片隅に放置したパズルだったが、買ってしまったものは仕方がないと半ば諦め状態で、部屋の中の不要物を片付けてからパズルを袋から取り出した。

『と、言ってもジグソーパズルなんて久しぶりだな。……以前やった時は……、そうだ！ 周りだ。周り、んと……枠組みから始めるんだっとな』

小さなパズルを眺めながら、気の遠くなる思いの中、僕は袋の中から蓋の中に全てのピースを移し替えると、パズルボードの上に枠組みになる隅と端のピースを取り出し始めた。

『それにしても小さい！ まだ若い筈なのに老眼になった気分だ。ふう〜！ 端っこって何個あるんだ!？』

そう思うのも無理はない。普通のパズルピースの10分の1の大きさなのにもかかわらず、普通のパズルであれば124個のところ、こいつは1296個もあるのだから。

1292個の端ピースと、4個の角ピースを探し続ける。途方もない話だった。朝起きて、部屋の片付けをしてから始めたというのに、昼前にして、まだ端ピースを探しているのだ。角ピースは見付かった。しかし、端ピースを繋げ合わせながらの作業は、僕を次第に発狂させ始めていた。

『あ〜！ もう！ 休憩！ 休憩だ!』

小さすぎるパズルピースを見る事に飽きてきた僕は、一先ず休憩がてら昼食にする事にした。

今日の昼食はインスタントラーメンにする。鍋に水を入れ、お湯を沸かすと袋から取り出したラーメンの塊を投入する。同時に餅を2個入れグツグツしたお湯の中で、ラーメンがほぐれていくのを見ながら、餅を溶かしていく。我流のタイミングで火を止め、粉末ス

スープを注ぎ込むと、スープが餅でドロドロになっている事を確認してからドンブリに移し替えた。

他人に言わせると「気持ち悪い」らしい【ドロドロラーメン】。何故この美味さが分からないのか、理解に苦しむ。見た目で判断しないで欲しい。麺と餅が餅で絡み合い、汁を飲む必要もない。しかも、ドロドロのおかげでラーメン自体が冷める事を防げるのだ。

僕は、ドロドロラーメンを堪能して食べると、机の中から秘密道具を取り出した。

『ふっふっふっ！ これさえあれば、もう少しスピードアップが望めるぜ！』

秘密道具をパズルの場所に置き、ドンブリと鍋を洗って片付けた。『さてと、第二回戦始めますか！！』

秘密道具を片手に座り込むと、パズルに向かい合った。

端ピースと角ピースの組み合わせを再開する。それにしても絵が見にくい。

『しかし！ ここで登場、秘密道具！ こんな時は、やっぱりドラ○もんにかぎるな。うおっと、ふざけている場合ではないな。僕は傍らに置いてあった【秘密道具】虫眼鏡（学術的に言うところ、べと言ったりする）を左手に握ると、ピースに書かれた絵柄を確認しながら、作業を進めていった。

『こ、こんな筈では……。話が違うではないか！ 謀ったな！ 謀りおつたな越後屋あ！』

と、ふざけている余裕などない。あれから3時間が経過した。しかし、まだ端ピースは完成しない。というよりも、絵は見易くなった。絵は見易くなったが、組み立てスピードは大幅ダウンだ。あれから3時間、3時間経つのに、右端のみしか完成していない。朝からこれだけ時間をかけて右端のみ。数にして250ピース。

それでも集中してやった。まあいい。これが毎日の暇潰しになるだろう。

『よし！ 一息入れたら、もう一戦やっつたろうではないか！ み、見ておれよ仮面○イダー。我が能力見せてくれるわ！』

僕は、マグカップに牛乳を入れてくると、パズルの横に置き、牛乳を飲みながら組み立てを再開した。

虫眼鏡がないと絵が見にくい。虫眼鏡を使うとスピードダウン。無情な現実の中で、僕は無駄なことを考えず、一心不乱にパズルに取り組んだ。

更に3時間が経過し、腹が減ってきた。当たり前か。もう19時だ。今から夕食を作るのは面倒臭さいので、今日はカップラーメンを2個食べることにした。

キッチンの棚からカップラーメンを取り出すと、ポットのお湯を注いで3分待つ。

『そういやあ、昼もラーメンだったな……』

そんな事を考えながら、時間を待った。出来上がったラーメンを一つのドンブリに移し替える。

『うん。いまいち美味そうではないな。そりゃそうだな。昼も夜もラーメンじゃ飽きるっての』

余計な思考は、そこで中断してラーメンを食べると、パズルは—
先ず中断して、ドンブリを洗ってから風呂と書いてシャワーだが……に入った。

風呂から出ると、マグカップに一杯の牛乳を左手に持ち、右手を腰に当てると一気に飲み干す。

『ぶはあ〜！』

大きく息を吐き出すと、その身体の火照りに少しの間身を任す。

そして、マグカップを洗ってからドンブリも一緒に片付けた。

『さあ！ もう少し頑張るか！？』

僕は、パズルの前に座ると、組み立てを再開した。火照った身体が心地良く、思い込みかもしれないけどスピードアップする。なるべく虫眼鏡を使って。絵と見比べながら。端ピースを組み立てていった。

本当にこれは絵と同じ柄なのだろうか？ そんな疑問に取り付か

れる。それでも、今は絵を頼み綱とするしかない。そんなこんなで、四苦八苦しなから作業を進めいく。

『ぐわあ！ も、もうダメだ！ し、死ぬ……。死んでしまおう！
目が、目があああ！ きよ、今日のところはこのくらいにしてや
ろう……。』

目の痛みに耐え切れず、時計に目を向ける。時間も晩くなり、明日は仕事なので今日は止めることにした。

歯を磨き、布団に潜り込むと目を閉じた。ずっと細かいパズルピースを見続けたせいだろうか？ 目の奥がチリチリと痛む。本当ならもつと作業を進めたかったのだが、今日は端ピースの上側と右側のみの完成で終了した。

現在完成ピース数649。残りピース数99351。まだ先は長い……。

完成図3（続・枠組み）

20時帰宅。今日の仕事は、思いの外捗った。普段なら見にくい書類の文字が大きく見えるし、サクサク進む業務に心地良さを覚えた。それもこれも、全てコイツの影響だろうな。

目の前に広がる、上側と右側の端のみが完成した、まだまだ未完のぐちゃぐちゃのパズル。その組み立てを始める前に、仕事の疲れを流しにいく。

『また始まるのか……。悪夢のような死闘が……。考えるな。考えるはならん！心を無にするのじゃ！さすれば、お主の心の眼は開かれるであろう！』

シャワーを浴びながら、気持ちを楽しみましょうと半分ふざけてセリフを考える。自分のセリフに苦笑いしながら、身体を洗う。シャワーから上がると、仕事の帰りにスーパーで購入してきた弁当をレンジで温める。チンツ！と軽い音が聞こえると、レンジから弁当を取り出して食べはじめた。とりあえず、食事中はパズルの事は考えないようにする。

そして弁当を食べ終わると、箸とマグカップを洗ってから、忌ましいジグソーパズルの前に腰を下ろした。

『さあ！今日も頑張るか！と、言ってももう21時だ。少し急がないといけないかな？』

気合いを入れ、残りの端ピースの完成を急いだ。と言いたいところだが、急げる訳がない。書類の文字はよく見えたのに、ピースに書かれた絵柄は殆ど見えない。それでも、出来る限り急いで組み立てを行う。

『うがあ！見えねえじゃんよ！見えなくてゴザルヨ！拙者には、よく見えないでゴジヤルよオ！！』

開始早々壊れ始めた。しかし、買ってしまったからには、完成させないと勿体ない。そんな一途な思いの中、またもや虫眼鏡を使い

ながら組み立てを行った。

パズルの組み立てを開始してから、そろそろ3時間が経過しようとしていた。しかしまだ、下も左も終わらない。一先ず今日は、左端だけを完成させようと、もう少しねばる事にした。

しかし、既に時間は0時を回っている。

『悠長にはしてられないな』

スピードアップする訳ではないが、ふざけるのを中止して作業に取り組む。

【カツ、ツツ、カツ、ツツ、カツ、ツツ、カツ、ツツ】

秒針の音が、やたら鮮明に聞こえる。時計を見るのが怖い。時間を確認したら、すぐにでも眠らないといけない気がして、時計を意識しないようにする。しかし、意識しないようにする時点で、時計を意識してしまっているため、作業の合間に時計の方に目が向きそうになる。

『後少し、後少し頑張ったら寝るから……』

自分自身に言い聞かせるようにして、時間を確認しようとする目を、時計からパズルに戻す。

完成図3 (続・枠組み) (後書き)

で、ここで力尽きました。

同じような繰り返し……。そして登場人物一人で最後まで……。と
考えたのですが、甘かった(汗)

日々の出来事に、ドラマはあっても、その一部分だけをカットして、
ドラマ化するのには、無理があったのか……。私の力量不足か……。

理想と現実（案内）（前書き）

介護現場の中身を面白おかしく表現しようと、試みたのですが、次第に難しい話になるため断念。

汚ない・臭い・キツイ・給料安い等と言われる介護現場ですが、楽しい事もあるんです。そして、人と人が直接的に関わる仕事だから、キツイ事を言ったり、言われたりする事だって。

理想と現実（案内）

就職難のこのご時世。就職難・就職難と言われるが、求人難の職場がある。それは、老人ホーム。

老人ホームと一言に言っても、「養護老人ホーム」「特別養護老人ホーム」「ケアハウス（旧軽費老人ホーム）」「グループホーム」「有料老人ホーム」「老人保健施設」と様々だ。

そんな中で【特別養護老人ホーム】を、ピックアップして話を進めたいと思う。

【特別養護老人ホーム】も大別すると二種類ある。まずは【従来型特別養護老人ホーム】。病院のような総室（多数部屋）のある施設の事である。もう一つが【ユニット型特別養護老人ホーム】。俗称【ユニット施設】と呼ばれる。特徴は、総室が存在せず、個室のみの部屋構造となっている。

そして今から話すのは、従来型特別養護老人ホーム。所謂【特養】の話である。

ここは【社会福祉法人】さんせんかい 山川会【特別養護老人ホーム】ちようじゆそつ 蝶樹荘。
その特養の【新人教育係】はなしま 花嶋 ろくと 六斗の悪戦苦闘の日々の記録である。

「花嶋君」

突然話し掛けてきたのは、介護主任の米原 まいばら 紀子 のりこであった。

「はい？ どうかしましたか？」

振り向き様に応えると、米原主任の傍らに見覚えのない女の子が立っていた。

「今日から勤務する事になった幹先 奈々（みきさき なな）さん。こちらは、新人教育係の花嶋君」

と、突然お互いの紹介をされた。

「はじめまして！ 幹先奈々と言います。これから、よろしくお願
いします！」

「いえ、こちらこそ、よろしくお願ひします」

元気な声で、深く頭を下げ挨拶されたので、こちらもそれに合わ
せようとおもったが、軽く挨拶するだけに済ませた。

「じゃあ花嶋君、後の事はよろしく！」

米原主任は、僕の肩をポンと軽く叩くと、そのまま去って行った。
『おいおい主任……。情報は？ この子の経験は？ 年齢は？ ど
うして何も言わずに行っちゃうかなあ……。』

去りゆく主任の背中を見つめていたが、新人を放っておくわけに
もいかないの、幹先さんの方に向き直った。

「じゃあ幹先さん。こういう所の経験は？」

「無いです」

おもむろに質問してみたが、即答された。

「じゃあ……。何か資格は？」

「無いです」

むむむ。これも即答か……。

「年齢は？」

「十九です」

若いなあ……。

「どうして、こういう所で働こうと思ったの？」

「だって、これから高齢化社会なんですよね？ だったら、一番就
職率高いじゃないですか！？」

成る程、それは一理ある。

「それに、今から必要とされる仕事って事は、お給料良さそうだし」
『そういう計算か……。この子は、すぐ辞めるな。まあとりあえず、
案内してからだな……。』

僕が、そう考えるのには根拠がある。この仕事は予想以上にハー
ドで、そして低賃金なんだ。ハードな部分は慣れれば、どうという
事はないが、慣れる事が出来れば……。って話だ。まあ、その辺りに

については、またそのうちふれる。

「じゃあ、幹先さん。まずは、フロアー案内をするよ。僕について来てくれるかい？」

そう言っただけで歩き出すと、幹先さんは「わかりました」と言っただけで、後ろをついて来た。

初めに訪れたのは詰め所。一昔前は寮母室と言ったり、最近ではスタッフルームと言ったりする。

その中で、ゆっくりお茶を飲んでいる女性に近付いた。

「長武さん。お疲れ様です」

「ん？ あ、お疲れ様。花嶋君、今日はどうしたの？」

「いえ、今新人の子を案内しているんですよ。あ、幹先さん。この人は二階のフロアーリーダーの長武ながたけ 信子のぶこさん」

「で、こちらが新人の幹先奈々さん」

紹介を済ませると、幹先さんが「幹先奈々です。よろしくお願いします！」と頭を下げている。

「こちらこそよろしく」

長武さんは、そう言っただけで僕の手を引き奥の休憩室に招き入れた。

「単刀直入に聞くよ。花嶋君はあの子どう思うの？」

「単刀直入すぎませんか？ まあいいです。そうですね。歳も若く、未経験。資格もない子なので、長くもたないかと……」

「成る程ね。で、今日はどうするの？」

「今日は各フロアーと業務箇所案内をするつもりです。これが越えられれば、一つステップアップですからね」

「いきなり見せるの？」

「当然でしょう。あの部屋をクリアしないと、継続なんて夢のまた夢ですから」

「それはそうだね」

「じゃ、失礼します」

僕は幹先さんの所へ戻ると、案内の続きを始めた。

「今、僕達がいるのが二階なんですけど、この施設には後、三階と四

階があるんだ。それぞれの居室配置は同じなんだけど、住んでいる人達の状態が異なるんだ。まずこの二階だけど、ここは要介護度の低い人達……。大体、一〜二つとところ。この上の三階は、認知症の人達が多い。認知症は要介護度に反映されにくいので、要介護度二〜三つとところかな。そして四階が、重介護者。寝たきりと呼ばれる事もあるね。移動を車椅子で行う人が多く、自操出来ない。中にはストレッチャーを使用する方もいる。要介護度は四〜五で、少し三の人が混じっているね。って一度に説明したけど、覚えられないよね。また、ぼちぼち覚えたらいいよ。スタッフの紹介もしたいけど、また日を改めてやろうか!? で、これから仕事をする上で重要なポイントを案内するよ。一つは食堂。一つは浴室。そしてもう一つが汚物処理室だね。一カ所一カ所説明しながら案内するから、ついて来てね」

まず初めに食堂へと案内する。

「ここが食堂だね。大食堂とも言う。入所者百二十名が揃って食事をする所だよ。そして、あっちにあるのが厨房。ここは変わっててね、五階に厨房があるんだ。でも、食堂の隣に厨房が併設されているから、温冷食がきちんと分けられるからいいね。幹先さん。今、食堂は空いているから、ちょっと気になるところなんかを、見てきてごらん。何なら、厨房のスタッフにも挨拶してきたらどうかね」

幹先さんの右隣に立ち、左手を腰に回すと右手を食堂の方へ差し出し、軽くお辞儀をするように、幹先さんを食堂の内部へと誘導した。

幹先さんは、物珍し気に机や椅子等を見ていたが、最後に厨房のカウンター前に行き、中のスタッフに何やら話して、深く頭を下げたと思うと戻ってきた。

「何か聞きたい事は？」

僕の傍まで来た幹先さんに一言掛けたが、少し困ったような顔をしてから、無言で首を横に振った。

「そう? じゃあ、次行こうか!？」

と、また歩き出す。基本エレベーターは使わない。施設内消費電力削減のためだ。老人ホームと聞くと、身体的障がい（障がいの【が】を仮名で表現している事に疑問がある方もいるかもしれないが、これは障がいの者が人達が提唱した事で、身体的に不自由であっても、他人に害を与えてはいない。というような事から、障がいと表すようになった）があるために、エレベーターを使うのが普通だと思われがちだが、基本スタッフは階段を使用する。

夏や冬の空調管理も同様で、空間温度が約二十六・七度になるように合わせ、スタッフが暑かろうが寒かろうが、その設定温度を変更する事はない。これもまた、施設内消費電力削減のためだ。基本特養は、スタッフに対してはかなりケチである。

そうこうしている内に、浴室へと到着。ちなみに浴室は一階にある。軽く息を切らす幹先さんを尻目に、浴室の前に立つと幹先さんの方を振り返った。

「今、入浴介助中だから、中に入ったらスタッフへの挨拶や、入所者への挨拶を怠らず、双方に対して失礼のないように。また、入所者の方々にも羞恥心はあるので、あまりジロジロ見ないようにね」
幹先さんが、軽く頷くのを確認してから脱衣室へと入る。

浴室は、脱衣室を中心にして二つの浴室に分かれている。一つは、温泉やスーパー銭湯等でもお馴染み大浴場。もう一つは、専門的施設でなければ、お目にかかれないような機械浴室。機械浴室にも二通りあり、一つは座位の状態のまま入るリフト型チェア浴槽。もう一つは、主に座位を維持できない方、所謂寝たきりの方が仰臥位のまま入るストレッチャー型浴槽である。

今日は機械浴の日であったため、幹先さんをまず、大浴場へと誘導した。

「ここで皆さん、一人でお風呂に入るんですか？」

何か質問しなければ……。と思ったのか、突然声を掛けられた。

「自分自身で全身を洗われる方は、極少人数だね。基本、自力で出来る事は御自身でやってもらうけど、どこか、若しくは全身の洗身

介助を必要とされる方が殆どだね。また、浴室は施設内で最も危険な所なので、一番注意が必要な場所となっている。何故一番危険な所かと言うと、まず裸になるから。身を守る物が無くなるからだね。次に、下が硬いタイルだから。転倒などとすると、即骨折・裂傷に繋がるからね。そして、浴槽内は浮力がかかるから。溺れる可能性があるからね。これで、大体分かった？」

神妙な面持ちのまま、幹先さんは軽く頷いた。それを確認すると、次に機械浴室へと移動する。

初めて見る光景に、啞然とし、声も出ないようなので、軽く説明する。

「機械浴室は、スタッフが操作するので、一見安全に見える。でも実は、機械からの転落や、機械の隙間に挟み込み等の事故が多く、一般浴……ああ、大浴場よりも事故が多いんだ。だから、一般浴を行うよりもスタッフは神経を張り詰めている。だから、そろそろ行こうか!？」

さつきよりも更に神妙な面持ちで、何度も頷く幹先さんを連れて、浴室を後にした。浴室を出ると、一度浴室内に僕だけが戻り、「ごめんね」とだけ言うておいた。

「さあ、最後に案内するのは、この仕事をするのに避けて通れない部屋になる。この部屋に入られないと、介護の仕事が出来ないと言っても過言ではない。うん。時間的にもいい時間だね。じゃあ、行こうか!？」

そう言うて四階へ案内する。タイミング良く、オムツカートが戻ってきた。

「ここが汚物処理室。オムツ交換を終えた汚染紙オムツを処理して、せいしき清拭……お尻拭きを洗う所だよ」

そう言うてスタッフが汚染オムツを袋に詰めたり、清拭を水洗いしているところへ連れていく。

今日は、普段より腸の調子が良かったのか、汚物室の中は排便臭で満たされていた。

幹先さんを見ると、臭いに堪えられないのか、顔をしかめ口を手で覆っている。

「ちなみに、排泄物は入所者の健康状態を把握するために、最も重要な情報なんだ。色・形状・臭い色んな要素を確認出来る。幹先さん！ 手！ 失礼だよ！」

幹先さんは、注意を受けゆっくりと手を口元から離れた。しかし、息を止めているようだ。

「紙オムツは産業廃棄物といって、普通のゴミとして処理出来ない。オムツの中に入っているポリマーが、それに当たるんだ。昔は違っただけだね。一昔前までは、布オムツを使用していたからね」

僕は少し意地悪に、ゆっくりと説明した。幹先さんは、呼吸が苦しくなってきたのか、真っ赤な顔をしながら頷いていたが、突然汚物処理室から飛び出して行ってしまった。

僕は、ゆっくり汚物室から出ると、幹先さんに近付いた。

「じゃあ、今日は少し早いけど、後は米原主任のところへ行つて質問とかあったらしておいで」

そう言つて「お疲れ様」と付け加えた。

幹先さんは「今日はありがとうございました。お疲れ様でした」と言つて、フラフラとした足取りで去つて行った。

『さあ、彼女……明日来るかな……？』

翌日、幹先さんは無断欠勤した。施設長が直接電話したが、辞めさせて欲しいと言われたそうだ。

仕方ないやね。綺麗なイメージだけでは務まらないんだよ。

「花嶋君。やっぱり辞めた？ あの子」

長武さんにそう言われたので、「仕方ないですね。昨日、汚物室……かなりきつかったみたいですし……」と言つと、「そう」と言つて去つて行った。

さあ！ 心機一転！ 僕も今日の業務頑張ろうかな！！

理想と現実（実習）

幹先さんが辞めてから、また就職者はいなくなった。数名の面接を行っている事は知っていたが、全て米原主任がカットしているようだった。

『主任……、今度はある程度施設内容を把握している人をお願いしますよ』

で、今日は新人教育ではない。今日は、ヘルパー二級実習の日なのだ。

朝の朝礼の後、僕は主任に呼び出され、一人の実習生の対応をする事になった。

実習生の名前は、武田^{たけだ} 邦一^{くにかず}さん。四十六歳のオッサンだ。前に働いていた会社では、それなりに価値のある地位にいたらしく、謙虚さが無い。態度が横暴で、偉そうにしている。実習生としての自覚が無いのか、僕に対して部下に接するように対応してくる。

『さて、このオッサンにどこから教えればいいかな……』

僕の配属は、基本三階。認知症の入所者のフロアーだ。

主任に武田さんを紹介されてから、三階に上がる。

「熊谷さん。おはようございます!」

まずは詰め所に入り挨拶する。この人は、熊谷^{くまがや} 保子^{やすこ}さん。三階のフロアーリーダーだ。

「おはよう。ん？ 花嶋君、今日は先生?」

武田さんを見付けた熊谷さんが、聞いてくる。僕は思わず武田さんを見たが、武田さんは挨拶する素振りも無く、じっとしている。

「武田さん! まずは挨拶してください!」

武田さんを睨みつけ、挨拶を促す。

「けど、この人俺よりも年下でしょ! どうして年上の俺から挨拶しないといけないんですか?」

『ダメだわ……この人』

そう思つて、熊谷さんに向かつて軽くお辞儀をすると、詰め所を出た。

『まずは……つと、トイレ誘導かな?』

と、武田さん連れて、一人の入所者のところに行く。

「荒笠さん。おはようございます」

この方は、荒笠あらがさ保たもつさん。七十二歳のおじいちゃん、アルツハイマー型認知症を患い、今では自分や家族の名前どころか、言葉すらも忘れてしまっている。身体的障がいは殆ど無く、自力歩行可能だが、当人に行動の意欲がなく、放っておくと朝から晩まで座り続けている。そのため、定時毎のトイレ誘導では、必ず声を掛けトイレまで案内するのだ。

僕は武田さんに、荒笠さんの誘導をお願いした。武田さんは、椅子に腰掛けたままの荒笠さんに近付くと、目の前から立つたまま、手を差し出した。

「はい！ 立つてよ！ トイレ！」

その言動に僕はカチンときた。

「ちよつと、武田さん！ あなた、一体何処で何を習ってきたんですか!? 年寄りと話す時は、目線を合わせるか、それよりも下から話すのが基本です！ それに、介護はしてやってるのではない！ させていただいでるの精神が重要なんです！」

「荒笠さん。おトイレ行きましょか？ じゃあ立ちますよ。せーの！」

僕は、荒笠さんの前に屈み込むと、荒笠さんに優しく声を掛け、手を軽く引いて立ち上がった。

「おいおい、花嶋君よ。それなら、初めからそう言ってくれないと」「あなたに【君】で呼ばれる筋合いはありません。しかも、上から目線で話される筋合いもあります。今回はスルーさせていただきます。ですが、態度を改めなければ、あなたの実習を強制終了しますよ。よく考えて話してくださいね」

荒笠さんをトイレに案内しながら、武田さんに注意、いや警告を行った。

『これで変われば、いいんだけど……』

昼食介助時になって、僕はエプロンを着用すると武田さんにエプロンを着けて食堂へ来るように指示した。

しかし、食堂に現れた武田さんは、エプロンを着けていなかった。

「武田さん。僕の言った事、聞いてました？」

「ああ。聞いてたよ。エプロンなんて前掛けは、キッチンに立つ女がする物だ。だから、俺が着ける必要はない！」

悪びれる訳でもなく、真顔で答える武田さんに怒りを乗り越し、呆れてしまった。

「あの……ですね、武田さん。エプロンは最低限の衛生管理を目的として必要な物です。本来ならば、手袋とマスクの着用も必要なのですが、それらをする事により、入所者の皆様に不快な思いをさせないように省略しています。実習にあたって必要な物の中に、エプロン書いてありましたよね。今すぐ取って来てもらえますか!？」

なるべく優しく説明して、僕は先に食堂に入った。

暫く待つと、武田さんがエプロンを着けて戻ってきた。その光景を見て、笑ってはいけなかったけど、笑いを堪える事が出来なかった。武田さんが着けて来たエプロン。それは子供向けのキャラクタ―が一面に無数プリントされた、それはそれは可愛いらしいエプロンだった。

「仕方ないだろ。娘のを借りてきたんだ」

恥ずかしそうに話す武田さんに、少し親近感すら覚えたのだった。食事介助は、実習生には行わせない。基本、見学実習だけだ。何故かと言うと、嚥下確認をしつかり行わないと、誤嚥による誤嚥性肺炎や、窒息死を引き起こしたりするからだ。

「じゃあ、武田さん。僕はこの方の食事介助を行いますので、武田さんは、自力で食べられる方・介助にて食べている方を見学してく

ださい」

そう言って食事介助を始めた。

暫くして、武田さんの姿が見えない事に気が付いた。

『まさか勝手に介助してるんじゃないだろうな!』

嫌な思いが脳内を駆け巡り、食堂内を見渡してみたがやはりない。

『何処に行ったんだ!? あの人は!』

溜め息をつきながら窓の方を見た。その瞬間! 僕は目を疑った。食堂の外のベランダに出て、優雅に紫煙をあげている武田さんを発見したからだった。

『クソツ! あのオツサン!』

食事介助中のため、離れられないのをいい事に、武田のオツサンは、こちらに気付かれているのを知らないかのように、二本目のタバコに火をつけた。

「花嶋君。行っていいよ」

「ありがとうございます。よろしく願います!」

状況をいち早く把握して、僕に声を掛けてくれた熊谷さんに、お礼を言つと、僕はベランダへと早足で歩いて行った。

「ちよつと! 武田さん!」

外へ出て大声を出すと、武田さんは右手を軽く挙げただけだった。ますます腹が立ち、自分でも分かるくらいドスドスと歩く音を出していた。

「あなた何してるんですか!？」

「ちよつと一服してただけだよ。そんなに目くじらたてなくてもいいじゃない」

「あなた、自分の立場分かってます!？」

「分かってるよ。俺が実習生で、花嶋君が俺の先生だよな」

真顔で答える武田のオツサンに、我慢の限界を超えた僕は、「ちよつと来てもらえますか!？」と武田のオツサンを引っ張って行った。

「栗山主任！　すみません！　この方、強制終了してください！」
僕は事務所に入ると、中にいた中年のオヤジ。栗山くりやま　正隆まさたかさんに声を掛けた。栗山さんは、主任相談員で、実習生の統括を行っている。

「どうしたんだい？」

「少しおっとりした口調の栗山主任だったが、僕の表情を見ると「ちよつと来て」と別室に武田さんと共に案内した。

「で……、その武田さんのどこがいけなかったのかな？」

栗山主任が真剣な眼差しで聞いてくる。

「実習生としての態度です！」

「ふむ。態度つてどんな？」

「まず、挨拶が出来ない。年寄りに対して上から目線で、命令的。

業務指示に従わず反抗的。勝手な判断での、休憩実施。もう、目に余る事ばかりです。こんな事を本人の前で言うのは何ですが、過去のしがらみを一旦、整理してから再実習した方が良いと思います！」

落ち着いた表情で、僕の話聞いていた栗山主任は、話を聞き終えると、武田さんの方を向き「で、如何ですか？」と質問した。

「俺は悪い事してないよ。年長者へは、年下から挨拶するのが通りだし、エプロンの必要性も今日初めて知った。タバコを吸いたい時に吸って何か悪いかい？」

その言葉を聞いた栗山主任は、僕に退室するようにすすめた。

その後、栗山主任と米原主任・武田さんの三人で話をし、態度を改める様子のない武田さんは、ヘルパー養成講座の責任施設へ連絡され、業務途中にて強制終了となった。

彼の悪かった点は、ただ一つ。過去の地位を捨てきれず、ズルズルと引きずった揚げ句、実習生と実習を受ける施設スタッフとの上下関係を把握出来なかった事だ。新人や実習生は、年功序列ではない。少し考えれば分かる通り、実習生や新人は、いつでも最下層のポジションに位置するのだ。

「とんでもない人に当たったね」
熊谷さんにそう言われたが、僕は黙って頷くしかなかった。

後日、武田さんの通うヘルパー養成講座の施設より連絡があり、
武田さんの再実習を行う事になった。

担当は、勿論……僕。

武田さんは、初め、恨めしそうに僕を見ていたが、一つ武田さんに教えてあげると納得したようだった。

教えた内容とは……、何故【実習の強制終了が存在するのか】という事だ。基本、施設は実習生より実習代金を受け取り実習期間の教育を行うのだが、これにより、実習強制終了をしない施設も確かに存在する。しかし、この施設のように強制終了を実施している施設も多数存在する。それは何故か？ それは、実習生が実習を受けた施設は、その実習生にとっては実務訓練所のような物で、資格取得後の就職先で「何処の施設に実習行ったの？」と聞かれると、その実習生の善し悪しに関わらず、施設の名前が出てしまうからだ。まあ、言ってしまうえば、施設間での世間体といったところだ。だから、態度の悪い・物分かりの悪い実習生等に関しては、【強制終了】
【再実習】等の処置がとられる。

この話をして、「もし武田さんが以前勤めていた会社に来た研修生が、態度が悪く、物覚えが悪かったらどうしますか？ たいして何も分かっていないのに、分かったような顔をして、別の会社に就職され、あなたのいた会社で学んだと言われたら、どうしますか？」と質問すると、「それは出来ん！ そんな奴を野放しにする事など、言語道断だ！」と言葉が返ってきた。

そこで初めて、気が付いたのか「先日はすみませんでした」と、頭を下げていた。

それから二日間、武田さんにとってはどうか分からないが、施設にとっては有意義な実習を行った。直接介護に関しては、基本見学実習を行い。間接介護には、率先して取り組んでもらった。業務の

合間・休憩時間・業務終了後を利用し、武田さんからの質問にも答え、細かい説明も行った。

ある意味、今回の武田さんの実習は、再実習になって良かったと僕は思う。あの時、あのまま、横暴な武田さんが実習を終えていれば、武田さんのためにもならなかったであろうから。

武田さんも似たような事を思ったのか、最終日、特養実習ではなくデイサービス実習だったにもかかわらず、栗山主任・米原主任・熊谷さん、それと僕を探して、一人一人に「お世話になりました。ありがとうございます」と深々と頭を下げて行った。

『おいおい。シャバに出所する犯罪者じゃないんだから……』

と、ふと思っただが、気持ちを通じたようで良かったと胸を撫で下ろした。

武田さんが、実習を終了してから米原主任に聞いて知った事なのだが、武田さんの再実習の担当を僕にしたのは、他にもない、武田さん本人たつての希望だったそうだ。

『ふう！ 可愛い女の子に好かれるなら良いけど、オッサンに好かれてもねえ……』

と、思ったのは、胸にしまっておこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2384w/>

未完作品（放置していた過去の産物）

2011年10月1日03時23分発行